

- 学生時代と図書館 (37) -
『現代のユートピア』

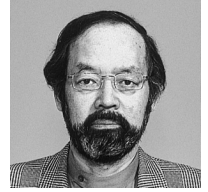
大垣 貴志郎

戯曲家・小説家の井上ひさしは、何かの本に「わたしは、図書館に住んでいた」と、書いていた。上智大学の苦学生の頃に、アルバイト代わりにイエズス会の神父が図書の整理を長期間させていて、館内出入り自由の身分をパロディー風に描写したのかもしれないが、わたしは、大学の図書館とはもう一つの、「勉強部屋」だと思っている。大学受験を志していた頃、大阪府立図書館によく通っていた。早朝から入館者の列に並んだ瞬間、自分も合格者への最短距離のコースを走っている一人なのだと錯覚を覚えた。そんな訳でその時分のわたしには、図書館とは何かに熱中できる「空間」以外なものでもなかった。それも、ユートピアのような理想の場所だ。

本学図書館の敷地は以前、「西院自動車学校」の自動車コース練習場であったことを思い出した。そのため、当時の図書館は四号館の二階にあったと思う。こじんまりしていたが、調べ物には事欠かなかったと、記憶している。この時期の、図書館の思い出は、これだけの大量の蔵書を整理して配架する仕事は、ちょうど、砂浜にある小石に一つずつ名札をつけるような、「気の遠くなる作業」だと思って、館員に敬服していた。

卒業後、1967年から三年間は、スペインのナバラ大学の図書館を利用した。院生時代であったので、畏敬する教授と同じ入り口をくぐって入館し、専用机に着席できることだけで名誉なことと思っていた。その時期の図書館の印象は、「ここは、なんと、静かな場所だ」と感動したことだ。本の頁をめくる音にも気を使ったものだ。図書館は、また、人との出会いの場所でもある。当時、同じ図書館の片隅の机を利用していた日本人がいたが、めったにその人とは館内で顔を合わすことはなかった。ある日、ふと、その人の机の近くの蔵書を探していた時、机上に置いてあった日本語の書

籍に目が止まった。「吉田秀和著作集」である。わたしの愛読書の一冊でもあった。現在、この人はある公立大学の学長になっている。



1973年から三年間は、メキシコの図書館の“寄生虫”になった。この大学院には大江健三郎が客員教授で来ていた。ちょうど、『ピンチランナー調書』を刊行したあとだったので、一緒にコーヒーを飲みながら息子の光さんの話や三島由紀夫について語ってくれたことを思い出す。メキシコに大江さんは6ヶ月ほど滞在していたが、帰国後、発表した作品が『同時代ゲーム』だった。その本の第一章は、確か、「メキシコから、時のはじまりにむかって」だと思う。メキシコ大学院大学の図書館には、開館開始の時刻から閉館時刻までお世話になった。絨毯引きの館内は音一つたたない。館員とも親しくなった。一日中、自分の「指定席」に座っていると、ユートピアにいる心地であった。授業時間と食事時間を除くと、私の“現住所”は図書館である。人との約束、人からの伝言「告知板」の役目もはたした。いつもそこに居たからである。机の前には次のセミナーまでに読む予定の課題図書が積まれている。後ろを振り返ると、留学期間が終わるまでに、そして、一生かかっても読破できないほどの多くの興味深い本が、私に声を掛けているような気がしてならない。まさに、知性の理想郷であった。

1981年に『世界の図書館』が丸善から出版された。今、その本の目次を見てみると、執筆者に多くの知己がいる。若気の至りで、わたしも「メキシコの図書館」の駄文を掲載させていただいた。

名所旧跡には、褒められたことではないが、時々、私たちは落書きを発見する。自分が青春のエネルギーを一時、燃えるように本に注ぎ込んだ思い出の図書館の机に、自分だけが判別できるささやかな「しるし」を密かに残しておきたい、と願うのは私だけであろうか。

おおがき きしろう(教授・ラテンアメリカ史)